

## globally-minded な気づきを促すカリキュラムのデザイン —教科連携を通じた国際教育の実践に向けて—

三ツ木 由佳（国際教育コース）

本研究は、「国際教育＝英語学習」という枠組みを超えて、多くの教科の連携により勤務校全体で国際教育を実践するためのカリキュラムのデザインを目指したパイロット実践とその検証である。学校全体で国際教育に取り組むための方向性の整理・検討を通して、現実的に取り組みが可能だと考えられるパイロット実践を行った。今回は、教科と地球的課題を組み合わせ、自分と世界のつながりに気付かせるツールに SDGs を取り入れ、5 年生英語科カリキュラムの再構築を試みた。また、英語科の単元改善を派生させた形で、宿泊活動における「平和学習」をコアとしてテーマに据えた教科連携のパイロット実践を行った。結果として、小さい実践ではあるが、一つのモデル事例として、既存の取り組みに付加する形による行事やテーマを中心に据えた教科連携の可能性を見出すことができた。今後も実践の蓄積を進め、学校全体で進める国際教育カリキュラムとして発展させていきたい。

### 1. 研究の背景と目的

世界のさらなるグローバル化や地球的課題を見据え、2020 年度改訂の新学習指導要領では、「持続可能な社会の担い手の育成」が前文で示された。2018 年 11 月には出入国管理法改正案が閣議決定され、日本国内の有様も今後さらに大きな変化が予想される中、大人が経験したことのない社会を生きて行く子ども達にとって、学校で取り組む国際教育の必要性はますます重要になっていくだろう。

開校 12 年目となる勤務校は、教育の指針として 4 つの柱を掲げており、その一つに「真の国際人を育てる」がある。開校当初より国際教育に着目し、積極的に取り組みを進めてきた小学校である。主な取り組みとしては、英語教育、海外研修、「ワールドウィーク」と呼ばれる国際学生を招いた年に一度の国際交流行事が挙げられる。

英語教育には、開校時から力を入れてきたこともあり、2020 年から教科化される小学校英語などでは一定の実践を蓄積してきた。「ファンクショナルバイリンガルの基礎育成」を目標に掲げ、1 年生から英語授業を開始、英語で授業を進めるティームティーチングの指導スタイルや、英語授業時数の多さなどを特色として打ち出している。

また、児童が自身の興味関心や目的に応じて個々に選択して参加する海外研修プログラムは、

5 カ国 7 プログラムと種類が豊富で、国内の小学校では唯一の実践となる 2 ヶ月間にわたるターム留学も行っている。これらの取り組みは、小学校のとしてはユニークで、他校との差別化を図るものとなっている。

しかしながら、昨今の国内外の動向を参考にすれば、ESD (Education for Sustainable Development : 持続可能な開発のための教育) の考え方やユネスコの推奨する「グローバル・シティズンシップ教育」などが展開されていることから、「国際教育といえば英語学習」という捉え方から一歩先に進め、学校全体で国際教育に取り組むための方策を検討する必要は、一部の学校に限られたことではなくなってきている。

筆者自身、勤務校で長年英語教育に携わってきた経験から、社会的なニーズや保護者からの期待の高い英語教育の存在を感じる一方、こういった社会の変化を受けて、英語コミュニケーション能力育成に並行して、学校全体で国際教育に取り組むための方策を検討する必要性を感じている。そのために、勤務校にはどういったアプローチが効果的なのか、「国際教育」の捉え方を転換した実践として、どのような取り組みが可能なのかを探りたいというのが、本研究の目的である。

勤務校が「真の国際人を育てる」教育として、これからのグローバル社会を生きていく子ども達に必要な力を、「globally-minded＝地球的視野に立って物事を捉え、主体的に行動できる素地・素

養」とし、その土台を築くことを目指していることから、「国際教育」の偏りを改善し、学校全体で国際教育に取り組むことが、10年先を見据えて進めていくべきことだと考える。

勤務校の国際教育のあり方を考えた時、この“globally-minded”というフレーズをキーワードとして活かしながら、国際教育を捉え直し、具体的な実践を検討していくことが重要となる。これは、新学習指導要領前文が示す「持続可能な社会の担い手の育成」を目指すことにもリンクする。

では、具体的にどのように転換を図り、国際教育を進めていくべきなのか。小学校という発達段階を考えた時、「知り、考え、行動する」プロセスのうち、最初の気づきを与えることがそれにあたり、カリキュラムの中に意図的に組み込んでいく必要があると考えられる。

勤務校は、多くの教科が専科制であること、そして、特別な教育課程のもと、総合的な学習の時間が英語科及び情報科に代替されているという特徴があり、専科制ゆえに、教科間の学びを繋いだり、教科の枠を超えた課題解決型・統合型の学習活動に取り組みにくい実態もある。

これら学校の状況や特徴を踏まえて、学校全体で国際教育を進めていくためには何が必要か。まず取り組むべきことは、「国際教育」の偏りと、個々の取り組みが相互に連携しにくいことから、学校教育活動全体の中では個々の活動が「点」として、体系化されていないという課題を解決していくことになろう。そのためには、教育活動の中心となるカリキュラムの在り方を今一度検討していく必要がある。

勤務校は、小学校としては珍しい指導体制を取っているが、別の見方をすれば、比較的柔軟にカリキュラム改善に着手できる余地があること、学年を超えた縦の系統性は担保されやすいことが利点として挙げられる。特に、英語科のカリキュラムにおいてはそれらの利点と、これまで蓄積してきた実践を活かしながら、英語コミュニケーション能力育成は国際教育の一部として、学校全体の国際教育を踏まえた実践を目指すことが次に取り

組むべきことだと言える。それは、今後の国際教育の中核として、他教科を巻き込みながら、学校全体の取り組みへと広げていく役割を担う可能性も含んでいると考えられる。

そして、英語科の取り組み及び役割の転換と同時に、学校全体で取り組む国際教育を進めるにあたっては、国際教育としてのカリキュラム開発が勤務校の課題解決に向けた糸口になると考えられ、本研究ではその検討をしていきたい。

そこで、学校全体で進めていく国際教育のカリキュラム開発を目指すにあたり、本研究では、どのようなアプローチが勤務校にとって効果的なのか、また、そのアプローチを踏まえて、具体的にはどのような実践が可能なのか検討していく。パイロット単元の開発と実践をもとに、その成果と課題を明らかにすることで、学校全体で取り組む国際教育カリキュラム開発に向けた一歩としたい。

## 2. 前提となる国際教育の捉え方

勤務校の現状については前述の通りであるが、これらは勤務校に限ったことではなく、文部科学省が国際教育推進にあたって指摘している国内の現状認識に合致する部分が多い。文部科学省の「初等中等教育における国際教育推進検討会報告」

(2005)によると、異文化理解・交流にとどまっていた「国際理解教育」から「国際社会において、地球的視野に立って、主体的に行動するために必要と考えられる態度・能力の基礎を育成するための教育」と定義される「国際教育」へという方向が検討され、国際教育を取り巻く現状と課題についても指摘された。その中の「英語活動の実施すなわち国際理解という誤解、単なる体験や交流活動に終始など、国際教育の内容的希薄化、矮小化への懸念」という指摘については、湯川笑子他(2009, p. 50)の言うように、「国際理解教育」の概念の抽象性ゆえの個々の教員の捉え方の違いが大きいこともその原因の一つだと考えられる。

また、国際交流等の行事運営において、教員自身の経験則に頼った形の運営が進められてきたことは、「国際教育に関する研修の重要性が十分認識されていない」という報告の通り、国際理解教育の学習領域といったものについて俯瞰した視点を

持ち、方向性を定めてこなかった経緯を説明する指摘ともいえる。

日本国際理解教育学会編 (2016, pp. 8-9) は、国際理解教育が育成すべき人間像として、次の2点を挙げている。

- ① 人権の尊重を基盤として、現代世界の基本的な特質である文化的多様性及び相互依存性への認識を深めるとともに、異なる文化に対する寛容な態度と、地域・国家・地域社会の一員としての自覚を持って、地球的課題の解決に向けてさまざまなレベルで社会に参加し、他者と協力しようとする意思を有する人間
- ② 情報化社会のなかでの的確な判断をし、異なる文化を持つ他者ともコミュニケーションを行う技能を有する人間

勤務校の実態として、英語コミュニケーション能力育成に力を入れて取り組んできた背景には、②の目的を英語コミュニケーション能力として、焦点化させてきたと言える。今後取り組んでいくべき国際教育の視点として、①の目標をいかに意識し、教育実践に取り込んでいくかが次のステップだと考えられる。

そして、これまでにないスピードで社会変化が起こっている現代において、八嶋智子・久保田真弓 (2014) の言う「意識のグローバル化」は子どもに限ったことではなく、我々大人にも求められている。森田真樹 (2016) は、グローバル・シティズンシップの育成を指摘し、ローカル・ナショナル・グローバルという要素が同時並行的に影響するという捉えへの転換の必要を強調し、図1のように示している。

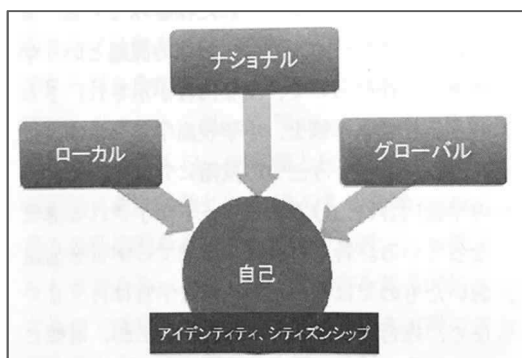


図1 グローバル時代のアイデンティティ形成  
森田 (2016 p. 123) より抜粋

こういった点においても、「国際教育」そのものの捉えを転換し、また「国際教育」を意識した授業改革を行っていくことが教員は求められている。また、別の観点では、M. J. Bennet (1998) が、異なる文化を受け入れる姿勢は意識的に学ばねば身につかないと指摘するように、教員が意識の持ち方を変えることにより、授業への「国際教育」の取り入れ方を変えていかねばならない。

### 3. 目指すべき方向性の整理

次に、前述の国際教育の捉え方を受けて、学校全体で国際教育に取り組むにあたり、目指すべき方向性を検討してみたい。永田佳之 (2012) は、図2のようにESDを実現するためのアプローチを4つに分類し、各アプローチを生かした実践を紹介、分析している。



図2 4つのアプローチの規定としてのホリスティックアプローチ

永田 (2012, p. 48) より抜粋

これは、ESDの特徴を引き出すためのアプローチを領域ごとに示したもので、「学習レベル」「カリキュラムレベル」「学校運営レベル」「地域課題レベル」に分類している。それぞれのアプローチを体現する実践の中には、もともとESDを意識していなかった実践であったり、これまでの実践とESDを照らし合わせることで、より豊かな実践へと発展していったものなど背景は様々だが、「アプローチ」を明確に意識し得る点において、ESDらしい実践だとされている。また、ESDで強調されるのは、その方向性や手法といった「アプローチ」であるとされ、持続可能な未来の構築という大きな最終目標に向け、そのアプローチに多様な幅を許容するものであると言える。

この分類の中で、カリキュラムレベルにおいて



は、染込ませ（インフージョン）型として、持続可能性という要素をどの教科にも染込ませるというアプローチだと説明している。この事例として紹介されている奈良教育大学附属中学校の実践では、従来の実践を活かしながら、各教科のカリキュラムを全体的に ESD へと改編している。また、竹村景生・曾我幸代(2012)は、その実践内容を詳しく紹介しており、学校全体で国際教育を目指すアプローチの一つとしての示唆を与えている。これは目指すべき方向性の一つとして考えられるが、永田(2012)の分類の中では、本研究で検討したいカリキュラムそのものを分類していない。

そこで、カリキュラムを軸として、学校全体で取り組む「国際教育」に向けた方向性を考えるために、幅広い取り組みを検討し、それらを俯瞰するために、筆者なりにタイプ別分類を試みた。国際教育の取り組みは、学校の実態によって様々であるが、学校の実態や運営の方向性など背景が異なる学校の取り組みを可視化することで、勤務校の位置づけを把握したり、目指すべき国際教育の方向性を見出すことの助けになると考えたからである。ゆえに、その良し悪しを判断することを目的とした分類ではないことを述べておく。

まず、分類を図に表し、目指すべき方向性を考える。図に表すために、学校全体での取り組みなのか、教科等個別の取り組みなのか、また、イベント等の単発型か、年間を通して、または学年を超えた継続型か、という 2 つの指標で縦軸・横軸を設定したものが図 3 である。

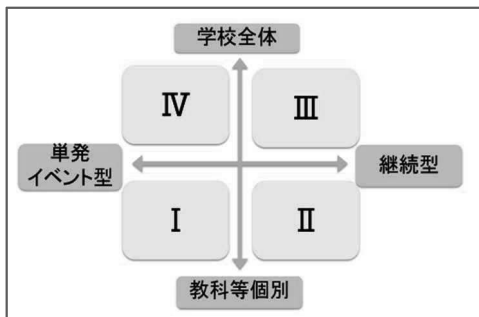


図 3 国際教育に関わるカリキュラムの分類

まず、I に分類される取り組みは行事やイベントとしての実践が可能であることから、主体となる教員が校務分掌等の分担を含めて、少なくとも

取り組むことが可能であるものが分類される。II の取り組みは、教科等に落としこまれることにより、個別の取り組みであっても継続性が保たれるが可能が出てくる。III は、学校全体の取り組みとして意識され、継続性が保たれたもの分類される。

逆に、IV に位置する取り組みを想定することは、ありそうであって実は難しい。仮に単発で実施するイベントが学校全体の取り組みになっている場合は、一過性のものでなく、学年を超えたつながりや、そのイベントに関連した前後の学びの場があってしかるべきで、そうなった場合、III に位置する継続性が担保された取り組みとなるはずだからである。ゆえに、単発で実施するイベントの多くは、個々の教科や分掌担当者に委ねられがちで、単発イベント型に位置する取り組みが学校全体のものになりにくい状況が生まれ、I に位置することとなる。

次に、学校全体で取り組む国際教育を目指すことから、具体的な取り組み例を示しながら向かうべき方向性を図に加えて考察してみる。国際教育として位置づけられるものは多岐にわたるが、その中でも特徴的な取り組みを 4 つ挙げる。

以下、A 型から D 型がその例である。

- A 型：国際交流などの単発イベント型**  
(例：勤務校)
- B 型：特定の教科等を中心に取り組むタイプ**  
(例：神戸大学附属中等教育学校)
- C 型：中心となる教科を据えたコア型** (例：上尾市立東中学校 (グローバルシチズンシップ科))
- D 型：ホールスクールタイプ**  
(例：自由学園、横浜市立永田台小学校)

これら 4 つのタイプを図 3 にあてはめたものが図 4 である。

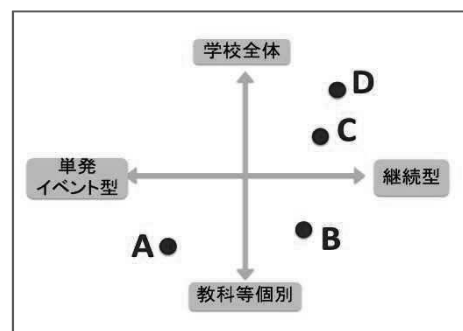


図 4 特徴的な国際教育の取り組みの位置

A 型は、交流活動等がイベント化しているタイプの学校であり、勤務校はここに当てはまると考える。単発型の国際交流をメインとした行事を実施するなど「国際理解」を目的とした活動であるが、イベントとして一過性の取り組みの位置付けになる。B 型は、特定の決まった教科等で取り組むタイプであり、国際理解は英語で、または国際教育に特化した教科を据えるなどの場合である。C 型は、総合的な学習の時間等中心となる教科を据えたコア型となる。これが B 型と異なる点は、教科の枠を超えた取り組みが可能になること、また、教員が教科に縛られず、複数で取り組むことになるため、B 型と異なる発展性が見込まれる。そして、D 型は学校全体で国際教育が意識されているホールスクールタイプとなる。学校全体で ESD に取り組む場合などがこれにあたる。五島敦子・関口知子(2010)では、学校運営の手法としてイギリスの学校を例に挙げている。また、永田(2012)においても、国内の ESD 実践のうち、全校レベルの取り組みとしてホールスクール・アプローチの実践校を紹介している。他にもユネスコスクールとして、ESD に取り組む学校も D 型に位置付けられると考えられ、学校全体の取り組みとして明確に打ち出している。

向かうべき方向性として、A 型から D 型に一足跳びに学校を変えられたらよいが、現実的には難しい。仮に、新しく大きな試みとして取り入れても、結局は定着しない取り組みとなってしまう可能性が高いこと、また、勤務校の実態を踏まえ、A 型→B 型→C 型→D 型のようなカーブを描くことが長期的な改善の方向性であると考えられる。

次に、勤務校が目指すべき方向性として、まず図 5 のように現状の A 型の地点から B 型に向かうにあたり、その具体的な方策を検討する。

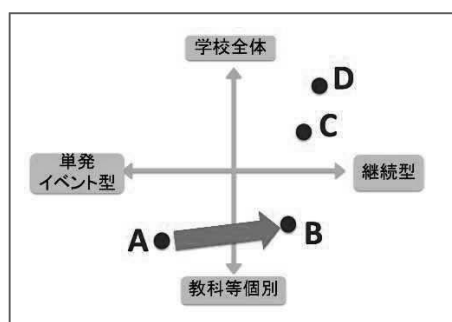


図 5 勤務校が目指すべき方向性

A 型から B 型に向かう改善の方向性として、教科での取り組みを実施していくわけであるが、それらを連携させることを意識した取り組みを考えたい。個々の教科でそれぞれに取り組む場合もあるが、出来る限り、学校全体の取り組みにしておくことを目指していることから、教科での取り組みを連携させることで、この矢印を太く、かつ上向きにしていくことが勤務校における改善の第 1 段階になると考える。それは、勤務校が専科制を敷いていることから、中学校や高等学校でよく言われるように、教科間の壁が高い現状を踏まえ、教科連携による国際教育に意識的に取り組むことが、勤務校の課題解決にはまず必要だと考えたためである。さらに、次に進むべき方向として、コアとなる教科を置くことが想定されるが、勤務校が特別な教育課程の下、教科を設定をしていることから、総合的な学習の時間のような統合型、探究型の学習の機会を保障することが難しい状況にも関連する。本来ならば総合的な学習の時間で取り組むべきことも、各教科で取り組む必要があることから、その代替となっている英語科や情報科においてその役割の一端を担いながら、教科連携を進めていくことが、A 型から B 型への矢印を太く上向きにすることにつながると考えられる。

本研究の一つ目の課題である学校全体で国際教育を進めていくためのアプローチとしては、教科の連携を踏まえた方向性を具現化することについて、検討した。これを受けて、次章では筆者が担当する英語科のカリキュラム改善を軸として、教科連携を踏まえたパイロット実践を行い、その可能性を考察する。

#### 4. 目指すべき方向性に基づく課題解決に向けたパイロット実践

##### (1) 英語科カリキュラム改善

本パイロット実践では、5 年生カリキュラムに教科と地球的課題を組み合わせ、自分と世界のつながりに気付くことを視野に入れた単元の再構築を試みる。5 年生は、特別な教育課程の施行により、3 年前から週 4 コマの英語授業を実施している。過去 2 年間取り組んできたカリキュラムでは、全 4 コマのうちの 3 コマを 4 年生までの授業スタ

表 1 2017 年度及び 2018 年度の英語科カリキュラム

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
2017	好きな事・得意な事・他紹介活動	過去形 (GW) Places・Direction	宿泊活動の思い出	おすすめ旅行をご提案	夏休み	World Week (インタビュープレゼン) 夏休み思い出project	夏休み思い出 project My usual morning (頻度を表す副詞)	オーストラリア・最上級 ハロウィン (プレゼン)	ハワイについて・比較の表現	家族行事について (日本・アメリカ・オーストラリア)	風邪ひき対処法 should/must	職業/京都伝統産業 project
2018	好きな事・得意な事・家族紹介活動・自己紹介スライド作り	Peace Week 今の世界を知ろう 宿泊活動の思い出・過去形 4年生に「My Peace」を伝えよう (異学年交流活動) 「しんちゃんの三輪車」 Places・Direction			「My peace」ポスター作り	World Week (見える文化と見えない文化) 「William's Windmills」のお話 日本の学校生活比較 服のチャカラプロジェクト (小中交流授業)	身の回りの工夫して作ろう 「William's Windmills」のお話 My usual morning (頻度を表す副詞) 夏休み思い出 project	ハロウィン (プレゼン) 比較の表現 (比較級・最上級)	職業/京都伝統産業 project	家族行事について 風邪ひき対処法 (should/must/)	困りごと解決隊プロジェクト 	おすすめ旅行をご提案

イルを踏襲したインプット中心の授業、残りの 1 コマをリーディングベースの授業として分割したり、2 コマはクラス全員で、残りの 2 コマはクラスを単純分割したハーフクラススタイルで実施するなど、試行錯誤を繰り返してきた経緯があることから、カリキュラムに改善の余地があること、また、児童の発達段階を考えた時、他教科での学びを含めて、社会的な課題に対して興味関心を抱く時期にある高学年で国際教育に関わる題材を扱いやすいと考えたからである。そのために、地球的課題を網羅し、その課題解決に向けて国連が掲げているSDGs(Sustainable Development Goals=持続可能な開発のための目標)を授業づくりに取り入れることとした。

表 1 は、2017 年度及び 2018 年度のカリキュラムである。2017 年度のカリキュラムでは、児童の発達段階に応じた知的好奇心を触発するテーマを設定し、それに合致する英語のインプットの質と量を考慮しながらアウトプット活動を組み込んだ形で単元をデザインしてきた。また、そこで大切にしてきたことは、児童がアウトプットできる英語、また、やってみたくと思える活動であった。児童の表現欲求を満たし、英語を使ってみたく感じさせることで、内発的動機づけを促すことに重きを置いてきたといえる。

2018 年度のカリキュラムで、特に改良を加えたのが点線で囲った単元の部分である。全ての単元に SDGs のアイコンがついているわけではないのは、あくまで付加できる部分に改良を加えたからである。必ずしも、全ての単元でそういった視点を取り込めるわけではなく、無理に関連づけようとするにより、そもそもの英語授業として身につけさせたい力が不明確になるといった状況を回避するため、指導者が単元目標をぶれさせずに授業ができる単元に絞って改良を加えた。

また、2018 年度のカリキュラムは現在進行中であるが、本実践探究論文執筆にあたっては今年度前半に取り組んだ実践に限って考察する。

## (2) 宿泊体験学習に関連させた単元の改善

まず、1学期の宿泊体験学習に関わる単元においては、宿泊学習のテーマである「平和学習」の視点を付け加えた。5 年生は、6 月に宿泊体験学習として広島を訪れる。滞在中は、平和教育の一環として、広島平和記念資料館を見学したり被爆者からお話を聞いたりする機会も設定されている。事前学習として学級活動や立命科(道徳)の授業の中で、「貞子の折り鶴」のお話を通して原爆の被害について学んだり、平和について考える機会を設けたりしてきたが、この間、他の教科で扱うことはほとんどなかった。あったとしても、個々の



教科内の取り組みとして実施され、他教科とのつながりを持たせた形では取り組んでこなかった。また、事後学習としては、振り返りを書くことその他、英語科の授業において、過去形を用いて宿泊学習の行程を思い出ししながら、印象に残ったことなどを含めたプレゼンテーション活動を実施してきた。今年度は、その宿泊活動のテーマである「平和学習」の視点を英語の単元にも付け加えた形になる。

表 2 は、英語科の本単元のおおまかな改良点を比較したものである。これまでは、宿泊活動前に英語授業でこの行事について触れることはしてこなかったが、今年度は早い段階から取り組みを始めた。事前学習として立命科（道徳科）で触れる読み物教材「貞子の折り鶴」を英語版でも読んだり、広島原爆資料館に展示されている「しんちゃんの三輪車」にまつわるお話は高等学校の英語テキストで扱われているため、これを簡略化して読み進めた。読後には、お話のキーワードとなる言葉を各自が選び、意見交流を通してこのお話が伝

えようとしているメッセージを考え、最終的には各クラスのワードクラウドを作成した。この活動を通して、実際に原爆資料館に行くにあたり、過去にあった遠い出来事ということではなく、家族や身近な人の思いなどに思いを馳せながら、自分ごととして感じるきっかけを与え、資料館に展示されている一つひとつのものには、「しんちゃんの三輪車」同様のストーリーが背景にあることを感じさせることを狙いとした。

宿泊活動後には、これまでも取り組んできた宿泊活動思い出プレゼンテーションの作成に取り組んだ。今回は、この活動に付け加える形で、宿泊活動に関連した学びを通した気づきを踏まえて、「平和」を自分に引き寄せて考えるためにTodd Parr の”Peace Book”という絵本の読み聞かせを行った。この絵本は、“Peace is helping your neighbor.” ”Peace is sharing a meal.” といったシンプルな一文で、様々な切り口から平和について語っている。この絵本を参考に、児童にも自分にとっての平和について考えさせ、英文

表 2 2017 年度から 2018 年度への単元の改善点

	「宿泊活動の思い出」 (2017 年度)	「My Peace」 (2018 年度)
宿泊活動前		(1) ”Why people get together?” 身近な国際交流からオリンピックなどを例に挙げ、世界で人々が集う目的が「平和」に関連していることに気づく。 (2) 世界で今現在起こっている紛争の状況を知り、「平和でない」生活では、何が失われるのか考える。 (3) 第2次世界大戦について知り、「貞子の折り鶴」の英語版（絵本）を読んで理解する。 (4) 「しんちゃんの三輪車」の英語版（高校英語テキストの簡略版）を読み、お話のキーワードとなる言葉を選ぶ。 (5) キーワードによるワードクラウドを作成し、お話のメッセージを考える
宿泊活動後	①過去形の復習。 ②宿泊活動時の写真を見せながら、取り組んだ活動について過去形を用いて文で述べる。 ③各グループで、3日間の取り組みを原稿にまとめる。 ④各グループで、発表に用いる写真を選び、パワーポイントスライドを作成、発表練習を行う。 ⑤それぞれのグループの発表を聞き合う。 ⑥振り返りを行う	(6) 「Peace Book」(絵本)の読み聞かせを通して、自身にとっての”My Peace”を考え、一文にする。 (7) 昨年度の①～⑥に加えて、4年生に向けてのメッセージを考える。 (8) 4年生の教室で、宿泊活動についての発表を行う。 (9) 振り返り (10) 夏休みの課題として、”My Peace”を含めたポスター <sup>2)</sup> を作成する(夏休み課題)

一文にまとめさせた。児童の中には、” My Peace is studying at school every day. ” My peace is having dinner with my family.”

“My peace is playing baseball.” など、日常生活において当たり前存在しているものに対して、改めて気づきを得ていることが感じられる記述が多かった。

また、これまでは宿泊活動の感想を含めた原稿をもとに各チームでスライドを作成し、クラス内で発表を行ってきたが、今年度はこの宿泊活動に来年参加する予定の 4 年生に向けた発表の機会を設けた。2泊3日の宿泊活動の内容を伝えるだけではなく、「平和学習」を通して自分が考える

「My Peace」を含めた発表とした。英語科の取り組みとして、異学年交流はこれまでも行ってきたが、児童にとっては普段とは異なる緊張感を伴う発表の機会となった。

本単元の取り組みは夏休み課題としても継続さ

せ、各自が作成した「My Peace」にイラストを加えたポスター作りを行った。後述するワールドウィークという国際交流行事において、その作品を用いて国際学生と意見交流する機会を作り、単元を超えたつながりを持たせた取り組みに発展させることができた。

### (3) 教科連携の取り組み「Peace Week」

前述の単元を派生させた形の教科連携の取り組みとして、「Peace Week」に取り組んだ。学年団の協力を得て、宿泊体験学習の事前学習を「Peace Week」と名付け、様々な角度から平和について考える機会を与えることを目的とした。

表 3 が、昨年度の実践と今年度、「Peace Week」として取り組んだ各教科の取り組みをまとめたものである。連携が可能な教科に参加してもらい、計 6 教科(国語科、社会科、音楽科、家庭科、立命(道徳)科、英語科)の特性を生かしながら、「平和」をテーマとした授業に取り組んだ。公立

表 3 2017 年度から 2018 年度への平和学習をテーマとした教科連携の取り組み

	2017 年度	2018 年度
宿泊活動前	<p><b>立命科</b> 「貞子像・千羽鶴折り」 「貞子の折り鶴」の絵本を通してエピソードを自身に引き寄せて感じさせ、平和について考えるきっかけを与える。学級委員が中心となって、貞子の折り鶴の学びを踏まえて、学年として折り鶴を組み合わせた作品を作成。広島訪問時には作品を持参。</p>	<p><b>国語科</b> 「詩から学ぶ『挨拶—原爆の写真によせて—』」 石垣りんの詩を通して、詩の構成といった国語的知識の学習に加えて、「貞子の折り鶴」とは異なる原爆に関わるストーリーから平和について考える。</p> <p><b>社会科</b> 「原爆の背景」 原爆そのものの仕組みや客観的なデータに基づいた情報提示。</p> <p><b>家庭科</b> 「千人針」 裁縫の単元で玉止め玉結びを学んでいることから、千人針が戦地に赴く人への願掛けとして取り組まれたエピソードに触れ、児童が取り組む教科の学びと結び付けて紹介。</p> <p><b>音楽科</b> 「Believe(平和をテーマにした歌)」 平和のメッセージとして、貞子像の前で学年合唱を実施。</p> <p><b>立命科</b> 「貞子像・千羽鶴折り」 2017 年度と同様の取り組みを実施。</p> <p><b>英語科</b> 「My Peace」(表 2 に掲載。)</p>
宿泊活動後	<p><b>立命科</b> 宿泊活動振り返り(作文)</p> <p><b>英語科</b> 宿泊活動思い出プレゼンテーション</p>	<p><b>立命科</b> 宿泊活動振り返り(作文)</p> <p><b>英語科</b> 宿泊活動思い出プレゼンテーション “My Peace”を 1 文にしたポスター作り 4 年生との異学年交流</p>



小学校などでは、担任が全教科を担当することが多いため、ある教科で学んだことを他の教科にリンクさせたり、教師のちょっとした話の中でつながりを持たせたりすることは多いだろう。勤務校では、1年生から4年生においては、国語科、算数科、社会科、生活科、立命科（道徳）以外の教科で、5、6年生においては中学校や高等学校同様の全教科専科制で授業を実施している。専科であるゆえに、教科の専門性を活かした授業を展開できる一方、他教科とのつながりを持たせたり、教科の枠を超えた取り組みを行うには、多忙な教員の日常の中で打ち合わせを行う時間調整の難しさや、そもそも自分が担当していない教科について言及しにくい雰囲気は否めず、教科間の壁が高いと言わざるを得ない。

こういった状況の中で、「平和学習」を共通テーマとして、計6教科で授業実践が行われたことは、学年教員団の協力体制の賜物であり、共通のテーマのもと、それぞれの教科の特性を生かした授業を通して、児童自身がそれぞれの学びをつなげていく形の取り組みとなった。各教科では、その時期の学習内容と連動させるなど、可能な範囲で取り組みが進んだ。学年集会で「Peace Week」としているような教科で平和について学ぶことについて紹介したことから、児童からは「〇〇先生の授業では、どんなことをするの?」といった興味を示す反応があったり、授業の中でも「〇〇の教科のPeace Weekで〇〇をやったよ。」といった声が聞かれ、児童からはこの取り組みへの前向きな姿勢が見られた。結果として、様々な教科で取り組んだ事前学習のまとめとして、英語の授業では、読み物教材に取り組んだ。「貞子の折り鶴」の英語版と高校英語教科書に掲載されている「しんちゃんの三輪車」を簡略化したお話に取り組んだ。他教科の学びによってスキーマが拡張されていたことから、本来ならば説明が必要となるような場面で、そういった状況に陥らず、お話の状況を想像できるだけの背景知識を持った状態で活動に取り組むことができた。また、原爆などの状況を知ることにとどまらず「、今も世界で起こっている紛争『紛争下の子どもたちの生活』「過去と現在」など様々な切り口で感じたり考えたりしたことをもとに、自分

自身にとっての身近な平和について考えを掘り上げていった。

#### (4) ワールドウィーク期間中の英語授業の改善

毎年9月に実施している「ワールドウィーク」と呼ばれる国際交流行事においても、5年生の英語授業の改良に取り組んだ。この行事は、約1週間に渡って取り組む大規模な国際交流活動である。国際色豊かな学生が在籍する立命館アジア太平洋大学(APU)から、国際学生約35名(例年、出身国は10カ国以上となる)を勤務校に招き、各クラスに配属、児童は国際学生と共に学校生活を送る中で、様々な教科を共に学んだり、学生の出身国の文化や風習について教えてもらう等、交流を深めている。

各教科の授業においても教科の特性を生かしながら交流授業を実施しているが、具体的な活動を見たとき、3F (Food, Fashion, Festival) に代表されるような、いわゆる「見えている文化の諸相」(五島・関口 2010)に偏りがちであることが散見される。また、これまでの英語の授業においてもこのような母国の文化的な側面を国際学生に紹介してもらい、グループごとに発表するような活動が主な取り組みとなっていた。

今回の5年生授業では、「見える文化・見えない文化」をテーマとして、その概念を紹介し、国際学生自身が日本に滞在する中で感じている日本文化を共有してもらい、その背景にあるものについて、グループで議論した。国際学生からは、電車の時刻表や自動販売機の多さ、小学生が保護者なしで登下校すること等多岐にわたるトピックが紹介された。児童にとっては普段意識しない日常生活の中に、「見えない文化」が多く隠れていることを感じる機会となり、なぜ日本人がそういったことをしているのか考えを巡らせたり、国際学生が感じていることを知り、自身と異なる視点を得ることができた。

以下、児童の振り返りの記述である。

- ・この授業で気づいたことは、私たちが当たり前なのは、ちがう国では当たり前ではないということです。
- ・日本人は、時間を大切にしているかけがえのないものと思っていることに気づきました。

次の感想からは、表面的には見えていないことに対する気づきや、その背景に意識を向けることの必要性を感じたことが受け取れる。

- ・色々な文化には、しっかり理由があるんだなと思いました。
- ・私たちの「あの国は〇〇が有名だね。」などの情報は、ものすごく小さいものなんだと思いました。
- ・僕たちが疑問に思うことは、たいてい見えないところのことだと思いました。
- ・教えてもらったことだけで、その国のすべてのことをわかったと思っはいけないと感じました。
- ・見えない部分を自分から見ようとすれば全体がよくわかる。そして、見える部分だけで決めつけてはいけないと思いました。

このように、はっきりとした答えがあるわけではない授業であったが、「文化」をメタ的に捉える視点を得たことを言葉にしている児童が多く、捉えたことに興味を抱いた様子が見られた。このような経験を一過性のものとして終わらせるのではなく、折に触れて、俯瞰的に捉える機会を与え、考えを深めさせていけるとよい。

## 5. パイロット実践の成果と課題

### (1) 英語科カリキュラム改善に関わる成果

国際教育の題材として、SDGs を5年生カリキュラムに取り入れた事により、授業者が資料収集や活動構成の幅を広げられたことが一つの成果であった。これまでの教材作りでは、単元末のアウトプットタスクへと繋げることを意識したインプットの質と量を中心に教材作りを行っていたが、本パイロット実践では、児童への気づきを促し、考えた事について日本語で振り返らせることに取り組んだ。今回の学びを通して、「知ることが大事」といった声が児童から聞かれたり、毎年9月に行うワールドウィークという国際交流行事では、国際学生との授業の中でも「平和」について扱い、外国の人の考える「平和」にも自分たちとの共通点が多いといった感想が出るなど、普段の授業とは異なる気づきを促すことに繋がった。

児童にとっては発言の自由度が増し、これまでの実践とは異なる思考プロセスを経て活動に取り組む事ができたと言える。また、普段の授業では

教師が英語で問う場合がほとんどであるため、児童から期待できるアウトプットに合わせた質問となり、必然的に限られた内容に狭められる。しかし、今回の場合は、児童の発話や書く活動において、日本語でのタスクを課したことにより自由度が増したことに加えて、他教科での学びを通してスキーマを広げた状態で、英語の授業でも「平和」を扱うことができたと考えられる。

それは、与えられたインプットが、単元末のタスクでのアウトプットを狙ったものではなく、与えられた内容も英語授業でよく扱われるような自己表現活動に留まらず、今の社会におけるリアルな課題など、思考を促すトピックであったこともその要因と考えられる。

ほとんどの児童にとって、英語に触れる機会が英語授業に限られることから、授業の中で最大限に豊かなインプットを与え、アウトプットの機会を創出することが前提となるが、テーマやトピックによっては、日本語で表出させることにより、globally-minded な気づきを促せる可能性が見出せたとと言える。今回のパイロット実践を通して、英語で何を理解させ、思考させるかといったインプットに最大限に重きを置く授業形態は、国際教育を題材として取り入れることで見出された、新たな手法であり、今後は他の単元でも引き続き取り組んでいきたい。

### (2) 教科連携の取り組みに関わる成果

今回のパイロット実践では、宿泊学習のテーマである「平和」を各教科に取り入れた形の教科連携に取り組んだ。教科でやるべき内容は、各担当者が責任を持って押さえながら、テーマに沿った題材を取り入れることで、専科制の良さを生かした教科連携による国際教育の可能性を探った。

本実践を通して、授業を担当した教員からは、教科連携や国際教育としての取り組みに対して、「こういった形であれば、国際教育にも取り組みそうだな。」「自分の教科だけでは出なかったであろう子どものつぶやきが聞けた。」「英語だけでは深めることができない内容に取り組むことができた。」など、児童の反応への前向きな感想や、国際教育としての取り組みへの可能性、また、授業の質的深まりの効果に対する意見が聞かれた。主体と

なって取り組んだ英語科教員以外から、このような肯定的なフィードバックを得られたことは一つの成果であった。

一教科単体ではなく、6つの教科が連携し、多くの教員を巻き込めたことの要因としては、学年の教員団が関わる行事と融合させたことによると考えられる。新しいことにゼロから取り組むというのではなく、「すでにあるものに付け加える」「少しのプラス」という印象が教員への負担感を下げ、それぞれの教科の状況に合わせて取り組みを進めることができた。

ただし、こういった教科連携は、教員団の協体制がなければなしえないことであり、筆者を含めて今回の実践に関わった英語科教員にとっては、提案に対して学年団から賛同と協力を得られたことは、非常に励みとなり、充実した実践となった。

### (3) 英語科カリキュラム及び教科連携に関わる課題

今回のパイロット実践は、英語科及び教科連携のいずれにおいても、教員が授業に取り組む上で、どのように国際教育をカリキュラムに組み込めるのか試してみることが第一の目的であった。ゆえに、評価や個々の児童の変容をどのように見取るのか、といった部分も網羅する実践には至っていない。特に、児童の見方・考え方を含めた globally-minded な意識の変容といった部分は、何かに取り組んだからといって、その直後の振り返りなどの分析から測れることに限界があることを含めて、今後も実践を積み重ねる中で、長期的な視点に立ち、目標の具体化や評価の指標を研究していく必要がある。

また、英語の授業の中身については、インプットとアウトプットのバランスには細心の注意が必要で、英語の授業で取り組むべき目的や意義をより明確にするためのポイントの分析や評価方法について検討していくことも今後の課題だと言える。

加えて、4年生児童への宿泊活動の様子を伝える交流授業における5年生の発表では、英語での発表を聞いていた4年生児童の中には、5年生の話している英語が難しく、理解できない部分もあった。学年を超えた交流は、普段クラスで共に過ごす友達の前で行う発表とは異なる緊張感と、学

んでいる内容の異なる相手に対して、伝え合う必然性を生む点で有効な手立てとなるが、伝え合う内容については再検討し、英語で、または日本語ですべきことの整理が必要であることが浮き彫りになった。

来年度以降も引き続き改良を加えながら、聞く側話す側双方にとってより良い交流となるよう継続して実践する中で、異学年連携も含めて学校全体の取り組みへと発展させていけるとよい。

## 6. 本研究の成果と課題

本研究では、勤務校で学校全体として「国際教育」に取り組むためのカリキュラム開発に向けて、どのようなアプローチが効果的なのか、また、そのアプローチを踏まえ、どのような具体的実践が可能なのかを探った。

結果として、図3 国際教育に関わるカリキュラムの分類においては、勤務校の実態から、IからIIへ向かうアプローチとして、教科連携の有効性が見いだせた。小さいパイロット実践ではあるが、学校全体で取り組む国際教育に向けた最初の一步として、行事やテーマをコアとした教科連携の可能性を見出すことができたことは、本研究の1つの成果であった。新しいものをゼロから作るのではなく、すでにあるものに付け加えることにより、各教科の年間計画に支障のない形で、教員の負担感を強わずに連携できることもわかった。今回の実践を、個々の教科の専門性を生かした形の教科連携のモデル事例として、今後は、他学年の宿泊学習に派生させたり、人権週間や給食週間など学校全体に関わる取り組みにおいても、行事をコアとした国際教育として実践の幅を広げていけるとよい。

一方、評価の指標づくりや、単元間・教科間の具体的な繋がりなどの分析など、本研究で取り扱うことのできなかった部分が多い。今後の実践の蓄積の中で、取り組むべきことを見極めつつ、研究を進めいきたい。

また、実践を蓄積していくためには、国際教育に関わる教員研修の在り方や、学校全体での実践の共有方法など検討すべきことも多くある。引き続き、勤務校の実態に即して、専科制の良さを活



かす形で、教員自身が楽しみながら教科連携に取り組める雰囲気作りと同時に、その条件整備にも取り組んでいけるとよい。

今回の実践を「点」で終わらず、次年度の実践に繋ぎながら、より多くの教科・教員を巻き込んで行う国際教育の実践を蓄積すること、そして、中長期的な方向性として、体系化を図りながら、学校全体で取り組む国際教育を持続可能な形へと発展させることを目指していきたい。

## 注

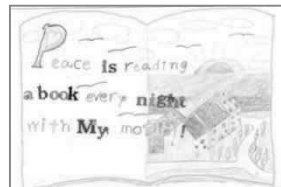
- 1) 読後活動の中で、児童がお話のキーワードとして挙げたものをワードクラウドの形で可視化した。<https://worditout.com/>



- 2) 児童が授業の中で作った英文を添えてポスターにした作品の例。



My Peace is playing baseball.



Peace is reading a book every night with my mother.

## 引用文献

神戸大学附属学校部神戸大学附属中等教育学校 (2018) 「SGH 第3年次報告会(兼平成29年度授業研究会)」

国際理解教育学会編(2015)『国際理解教育ハンドブック-グローバルシティズンシップを育む-』明石書店, pp. 8-9.

五島敦子・関口知子(2010)『未来をつくる教育ESD 持続可能な多文化社会をめざして』明石書店

埼玉県立上尾市立東中学校(2018)「持続可能な社会づくりの担い手を育成する新設教科「グローバルシティズンシップ科」の研究開発」平成27年度~30年度文部科学省指定研究開発校(4年次)

竹村景生・曾我幸代(2012)「ESD 実践のためのインフージョン・アプローチ-奈良教育大学附属中学校のカリキュラム再編」『国際理解教育』Vol. 18 日本国際理解教育学会編集 明石書店, p. 63

永田佳之(2012)「ESD の実践へと導く 4 つのアプローチ-日本におけるグッド・プラクティスからの示唆-」『国際理解教育』Vol. 18 日本国際理解教育学会編集 明石書店, p. 48

日本経済新聞 (2018)「入管法改正案を閣議決定 単純労働で外国人受け入れへ(2018年11月2日)」<https://www.nikkei.com/article/DGXMZ037249690R01C18A1MM0000/>

森田真樹(2016)「現代における国際教育の課題と教育実践の視座-グローバル・シティズンシップの育成という視点を含んで-」『立命館教職教育研究』特別号, p. 123

文部科学省(2006)「初等中等教育における国際教育推進検討会報告 -国際社会を生きる人材を育成するために- 平成17年8月3日」[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/sho](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sho)

[tou/026/houkoku/attach/1400589.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sho)

八嶋智子・久保田真弓(2014)『異文化コミュニケーション論 グローバルマインドとローカル・アフェクト』松柏社

湯川笑子・高梨庸雄・小山哲春(2009)『小学校英語で身につくコミュニケーション能力』三省堂, p. 50

Bennett, M. J. (ed). (1998). Basic Concepts of Intercultural Communication: Selected Readings. Intercultural Press.